

佳作

じいじがふれっくすのまじっく

栃木県 栃木市立吹上小学校四年 石川 結翔

ぼくの大切なおじいちゃんは今年、家族みんなが見守る中で、しずかに天国へ行きました。

おじいちゃんは、約一年半前、かぜをこじらせ、肺えんという病気になり、入院しました。コロナのき制で、どんなに会いたくてもがまんしなければならぬ。ぼくは、お父さんをお願いをして、少しの間病室からテレビ電話でつないでもらいました。しばらくぶりに会えたおじいちゃんは、人工こきゅう器につながれていて、とてもつらそうでした。でもぼくが、

「じいじ、がんばって。みんな待ってるよ。」

と言うと、大きく目をあけて、うなずきながら笑ってくれたのです。その後、少し元氣になり、退院できました。ぼくはうれしくてたまらなかつたけれど、帰ってきたおじいちゃんは、前のように歩けなく、

すきなことを自由にできなくなっていました。

ぼくは、おじいちゃんの家のすぐ近くに住んでいます。毎日様子を見に行くことが日かになり、学校で楽しかったことや、ほめられた事などたくさん話しかけました。こきゅう器をつけながら、一生けんめいやさしく聞いてくれました。でも、おじいちゃんの元氣は少しずつなくなってしまう救急車を呼びました。この日、ぼくたち家族は、これからおじいちゃんとの時間をどうすごしていくか決めたのです。

家が大好きなおじいちゃんを、みんなでお世話をして最後まで一緒にすごそうと決め、おばあちゃんとお父さん、お母さん、ぼく、お姉ちゃん、毎日一生けん命でした。訪問しんりょうの先生やかんごしさん、ヘルパーさんなどたくさん支えてもらいました。がんばって生きているおじいちゃんのためにみんなでたくさんよりました。ぼくは大きな紙に家族の絵をかくてベッドの前にはりました。苦しみながらもじっと見つめてよろこんでくれた顔は忘れません。

お別れの日、悲しくて信じたくなくて、泣きわめきながら、むくんだ手をさすりつづけたけれど、おばあちゃんが、

「じいじは本当に幸せだった。ありがとう。」
とぼくの手をさすって言ってくれた時悲しみの何倍もの感しやに変わりました。

おそう式が終わり、おじいちゃんのいない家にもどった時、おばあちゃんがおじいちゃんのさいふに家族五人分のお札が残っていた事に気がきました。

「じいじからの最後のおこづかいだね。」
と一枚ずつわたしてくれました。ぼくはむねに当てて強くにぎりしめました。

この夏は、はじめてむかえたおぼんです。おじいちゃんの好きだったすず虫が鳴いた気がして、ぼくはすぐにお線こうをあげました。

「じいじ、ばあばはみんなを守るから心配しないでね。」